

# ねて 寝手神社の伝説



上西山の寝手神社

福岡県筑紫野市山家に上西山、下西山という所があります。そこは大根地山の麓、冷水峠を少し下ったところで、産神はいずれも大根地神社<sup>(1)</sup>から勧請された「寝手神社」です。勧請の年は明らかではありませんが、上西山の寝手神社には万延元年(1860)建立の鳥居、元治元年(1864)銘の神額などがあり、下西山の寝手神社には、天保3年(1832)建立の鳥居があります。この寝手神社には、次のような話が伝えられています。

## ◆あらすじ

むかし、源頼朝が富士の巻狩りを催したとき、白狐がはるばる九州まで逃げのびて来て、大根地権現から「よくここまで逃げ延びてきたものだ。



下西山の寝手神社

ゆっくり寝てゆけ」とねぎらわれたといい、それから寝手神社といわれるようになりました<sup>(2)</sup>。

## ◆伝説の背景

なぜ、富士の巻狩りにまつわる話が当地に伝わっているのでしょうか。その理由については、次のように推理してみたいと思います。

鎌倉幕府の記録『吾妻鏡』によれば、頼朝が富士の巻狩りを行ったのは、建久4年(1193)5月26日から3日間です。寝手神社の本宮である大根地神社は、社伝によれば神功皇后が羽白熊鷹<sup>(3)</sup>を征伐する際に登山し、天神七代、地神五代の神を祀った神社であり、建久3年(1192)に素戔鳴尊、大市姫命が合祀され雲間稲荷大明神になったとされています。

稲荷信仰は京都市伏見の稲荷大社を総本社として、中世～近世にかけて盛んになりました。現在、その神社数は全国で三万余に達し、諸神のうちでは最も多いといわれています。また、キツネが稲荷神の神使とされるようになるのは中世に入ってからのもので、『稲荷大明神流記』(14世紀)には、京都船岡山の狐一家が稲荷山に入り、稲荷の従者になったとあります<sup>(4)</sup>。このようにみえると、寝手神社の伝説が生まれた背景には、稲荷神とキツネ、合祀と巻狩りの年代



大根地神社の参道(旧長崎街道の冷水峠)



がほぼ同じころ、ということが深く関係しているように思われます。

#### ◆関連のある史跡

富士の巻狩り最終日の夜に実行された「曾我兄弟の仇討」は、歌舞伎や狂言で一躍有名になりました。兄の曾我十郎なじみの遊女・虎御前の墓と伝えられる場所は全国に散在していますが、そのひとつが長崎街道沿いの筑穂町阿恵にあります。この墓のことは、江戸時代中期の地誌『筑前国続風土記附録』にも記されています。



虎御前の墓

また、武蔵国平山郷の在郷領主で頼朝の拳兵に参陣した平山季重は、寿永年間(1182～85)に九州へ下り、筑前国山家の西山に居住、建久2年8月25日に没したと伝える記録があります<sup>(5)</sup>。その墓といわれる石塔

(1890年再建)は、今も筑紫野市山家の池田にあります<sup>(6)</sup>。

いずれも史実として実証することは困難ですが、頼朝に関連のある話として地域に根づいたのでしょう。



平山季重の墓



小根地神社

また、筑穂町内野には、小根地神社という小社があります。本社が高山の上であり、冬の雪深い時期には参詣が困難であることから、山下に勧請したといわれています<sup>(7)</sup>。勧請の年はよくわかりませんが、江戸時代中ごろには、すでに現在の場所にあったようです。内野の宿場から西南、大根地山側へ続く細い踏み分け道のような参道を上ったところにあります。周囲は竹藪で、集落からは神社の姿は見えませんが、境内はきれいに清掃されており、今も篤い信仰のあることがわかります。

なお、富士の巻狩りに関する話は、近隣の大分県久住町・猪鹿狼寺、同県中津江村・伝来寺にも伝えられていますが、寝手神社のそれとは内容や伝播の経路を異にしているようです。(山村淳彦)

#### 〈註〉

1. 『筑前国続風土記附録』によれば、根地とは内野の社人がいうことで、竈門山山伏の古伝には根手嶽根手権現と云う、とある。
2. 筑紫野市教育委員会編『ふるさと筑紫野』1976年
3. 筑前国夜須郡荷持田村を本拠とした伝説上の豪族。強健で身体に翼があり、よく飛び高く翔けることができた(『日本書紀』)。
4. 福田アジオ他『日本民俗大辞典』上1999年
5. 朝日村大庄屋平山重内著『役儀伝記』1857年写
6. 福岡県教育委員会編『長崎街道』歴史の道調査報告書 第一集 2003年
7. 『福岡県地理全誌』3(『福岡県史』近代史料編1989年所収)